
聖女様と呼ばないで（仮）

トキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖女様と呼ばないで（仮）

【Zコード】

Z0127Z

【作者名】

トキ

【あらすじ】

男性が死ぬほど苦手であるということを一番の理由に修道女の道を選んだ少女、コレット。彼女の歌う聖歌は、近隣の村の老人達から「癒される」と大評判だった。それを聞き付けた国王が、国の観光収入のために彼女を聖女として祀ると決めたものだから大変、連れて行かれた神殿で待っていたのは、聖女を守る騎士三人（全員男性）でした！？

登場人物紹介（イラスト有り）

【 聖女様と呼ばないで（仮）】 登場人物紹介

【 登場人物紹介 】

> i 3 6 1 3 9 — 9 2 5 <

コレット

15歳。

男性が死ぬほど苦手なことを一番の理由に、修道女として生きる道を選んだが、

あることをきっかけに、聖女に選ばれてしまつ。

裁縫や料理は若干苦手で、畑仕事や大工作業をしていのうが得意。

> i 3 6 1 4 0 — 9 2 5 <

セドリック

25歳。

ライナグル国の王子。

他人に対して冷たい態度を取る時もあるが、反面、部下には甘い部分もある。

> . i 3 6 1 4 1 — 9 2 5 <

ジエイラス

17歳。

通称ジエイ。

口調も性格もラフで、人懐こい。

セドリックに仕えているが、その口調のせいでよくキアランに怒られている。

> . i 3 6 1 4 2 — 9 2 5 <

キアラン

25歳。

落ち着きがあり、普段は穏やかだが、少々頭が固く礼儀作法などにはうるさい。

セドリックには幼少の頃より仕えている。

プロローグ（前書き）

初めまして、もしくはこんにちは！
拙作に手を留めて下さり、ありがとうございます。
不定期更新になる予定ですが、のんびりお付き合い頂けたら嬉しい
です。

プロローグ

たぶん今私が置かれている状況のことを、『窮地』とか『危機』とか言うのだと思う。

広く豪華な部屋の中央に置かれた、これまで目にしたことさえないような天蓋付きのベッドの端に恐る恐る腰かけた私は、緊張に身を固くしていた。

別に、命を取られるとか、そう言った類の話ではない。ではないけれど、私にとって『それ』は、何よりも恐ろしいもので……。

「　おい、コレット嬢。聞いてるのか！？」

「は、はいいいい！？」

刹那、頭上から降ってきた若干苛立ちが含まれたような聲音に、びくりと身体全体を跳ね上げる。

その瞬間、声の主としつかり目が合つてしまい、慌てて顔ごと逸らした。

肩まで伸ばした淡い金色の髪に、深い碧色の目。均衡の取れた身体に、聖書の中出てくる聖人のように整った顔立ちの男性。

そう、『彼』が、今私が抱えている最大の問題だった。

なぜなら　。

「聞いていたなら、今俺が話したことと言つてみる」

身を乗り出し、私の両太腿の脇に手を付いて、彼、セドリックは威圧的に問う。

正面を向けばきっとお互いの鼻の先がぶつかりそうなほど近くまで彼の顔が迫っているのを感じ、私はこれ以上ないほどに身を硬直させ、不自然に首を捻った姿勢のまま早口に答えた。

「“自分が修道女であつたことは今日限りで忘れる。ここで俺の指導の下、聖女として相応しい気品と所作、その他諸々を身に付けていつてもうらう。いいな？　おい、コレット嬢、聞いてるのか！？”

「…………」

顔を背けていても、彼が目を眇めたのを空氣で感じた。どこか間違っていたのかと焦り始めた頃、やつとで彼は私から身を離した。彼の重みを失ったベッドが軽く弾み、ふわりと身体が浮くような感覚がして、一瞬息を止める。

「最後のは必要ないが……聞いていたならいい」

セドリックは呆れたような口調で言つと、一つ、大きな溜息を洩らす。

私はと言えば、頑なに彼とは全く別の方向に顔を向けたままだ。

「さつきからずっと気になつていてるんだが、お前、なぜ目を合わせない？　俺と話すのがそんなに嫌か」

「そ、そうじやな　っ！」

そこまでは私の言葉は続かなかつた。

セドリックの指が私の頸を強く掴み、おそらく酔いほどまで引き攣つていると思われる顔を、彼の方へと強制的に向けたからだ。

「人と話す時は、相手の顔を見る。田舎娘だとは聞いていたが、そ

の上礼儀知らずだとはな

緊張が最高潮に達し、私の心臓は、今にも破裂してしまいそうだった。

気付いた時には私の腕は電光石火で彼を突き飛ばし、足は窓辺へと一目散に逃げていた。

身に着けた修道服のスカートを握り締めて、限界に達した緊張のあまり身を小さく震わせる。

がくがく震える膝に何とか力を籠め、呆気にとられたように固まっているセドリックに、叫ぶようにして告げた。

それは、私が『修道女』という道を選んだ最大の理由だった。

「ごめつ、ごめんなさい、私、私は、男の人ダメなの、苦手なんです！」

「私が一体何をしたと言つの……も「いやだ、帰りたい」

フカフカのベッドに頭から落ちるようにして身体を放り出し、私は突如自分の身に降りかかった不幸を嘆いていた。

これまで生きた十五年の歳月に起こった出来事で、こんなにも追い詰められたことはなかったと思つ。

事の始まりは、いつもと何ら変わらない日の朝に院長様が私に告げた、思いもよらない言葉だった。

「シスター・コレット。あなたは今日、それも今すぐニ、ニニを出なければいけません」

これに対する私の反応は、大混乱。

瞬間、料理当番だった時に鍋をひっくり返してしまったことや、お祈りの言葉を間違えてしまつたこと、それから、修道院を訪れていた小さな女の子のリボンが風に飛ばされて木の枝に引っ掛けかり、それを取ろうとして木に登り派手に枝を折ってしまったことなどなど、自分がこれまでに犯した失敗の数々が一気に脳裏を駆け巡つた。

けれど、修道院を追い出されてしまつほどの致命的なドジはしていないはず。

慌てて、嵐にも勝る勢いでこれまでの失敗を懺悔し、引き続き修道院に置いてくれるよう懇願する私の言葉を、院長様は微かに引きつった笑みで遮つた。

「違うのです。あなたを追い出さうと言つではありません。あなたは国王陛下に聖女として認められたのですよ」

「聖、女……？」

まさかの理由だった。

一瞬、目の前が真っ暗になり、心臓が止まつた気がした。

なぜ、今になつて　と。

けれど、院長様が重ねた理由は、更に思つてもいなかつたものだつた。

「あなたが歌う聖歌が人々の心を癒すという評判が、国王陛下のお耳にまで届いたのです。國はあなたを聖女と認め、かつて聖人が住んでいた神殿に迎えるとのお達しです」

「私の……歌？」

『なんだ、そんなことか』と安堵すると同時に、今度は『や、待つて、なんでそんなことでー?』といつ疑問と焦りが、瞬間、脳裏を怒涛のごとく駆け巡る。

「ちょ、ちょっと待つて下さい、そんなの強引かつ無茶苦茶なこじつけです！　院長様だってご存知でしょう、私の歌が人を癒すだなんて大袈裟な……ちょっと村の老人会の人達に褒められてるだけじゃないですか！」

自分で言つのも何だけど、私は修道院での仕事のうちでは料理とか裁縫とかは少しばかり苦手で、それよりも畠仕事をしたり、大工仕事をしているほうに向いているようだった。

まるで女らしくない私だけ、一つだけ、比較的女らしい特技もあつた。

それは、歌だ。

聖堂に立ち、共に学ぶ修道女達と声を合わせて歌う時、心が震えるような喜びに満たされる。

そんな私の歌を聞いて、村から礼拝に通つてくるお爺さんやお婆さんは、『コレットちゃんの歌を聞くと、本当に癒されるねえ』とか、『持病のリュウマチが軽くなつたよ』なんて、目を細めて、大袈裟に褒めてくれるのだった。

私は素直にその称賛を喜んで受け取っていた。

とは言え、それが『聖人の奇跡』レベルには足元にも及ばないといつことくらい、年端もいかない子供にだつてわかるはず。この程度のことでは聖女になれてしまうのなら、国はとっくに聖人や聖女で溢れ返つていたつておかしくない。

何はともあれ、私の必死の抵抗は当然あつさりと流され、このような経緯から住み慣れた修道院を去らなければならなかつた。

実は院長様は私を気遣つて告げなかつたらしいけれど、と言うけど、本当のところとしては、そのことを私が知つたら逃げると思つたからに違ひない。その知らせは七日前に院長様の元に届けられていたらしい。

命じられるままに慌ただしく荷物を纏めて、それから修道院のこじんまりとした中庭に出ると、正面の石造りの門の前に、まるで王侯貴族が乗るような馬車が待ち構えていた。

その周囲には、珍しく姦しいかしま声を上げるシスター達が群がつてい。院長様が咳払いをすると、皆慌てて俯き、ばつが悪そうな表情

で自分の仕事へと疋早に戻つて行つた。

彼女達が注目していたのはその馬車ではないことに、近付いてみてすぐに気付いた。馬車の元に、一人の、それも見栄えのする男性が控えていた。

短く整えたクセのない黒髪に、穏やかな琥珀色の瞳。

お城の広間で王様の傍に控えている騎士のような、細身の黒いロングコートを纏つていて、それがまた違和感もなくすんなりと似合つてしまつ、そんな人物だつた。

彼は待ち人つまり、院長様と私を迎えると微笑み、もたもたしていた私の手から荷物を素早く受け取る。

そしてこれが、私に課せられた最初の試練だつた。

「コレット様、お待ちしてました。私の名は、キアランと申します。貴女を神殿まで安全にお迎えする役目を仰せつかっております。さあ、どうぞ」

キアランと名乗つた彼は、丁重に言つて優雅に腰を折り、馬車の扉を開け、まるでお姫様にでもするかのように、私に手を差し出す。苦手な男性を目の前にして、肩を跳ね上げ身を竦めて後退りした私の背を、院長様が容赦なく馬車に押し上げた。

『院長様つて、けつこうな年齢に達しているはずなのに、腕力は壮年の男性並みよね』と、シスター仲間が言つていたのが脳裏を過る。

外から閉じられた馬車の扉がまるで鉄格子のように冷たく感じられた私は、子供のようにみつともなく、思わず窓に飛び付いてしまつた。

自分の終の棲家になるとばかり信じて疑わなかつた赤レンガ造りの小さな建物と友達の姿が、見る間に遠ざかつて行く。

その時点では私は既に、まるで地獄に突き落とされたような絶望的な心境に陥っていた。

けれど、それでも神殿に着くまでは、馬車の中も途中で泊まった街道沿いの宿でも院長様と一人きりだったからまだ良かつたと、今になつて思う。

本当の試練はここからだつた。

五日かけて到着した私達を待つていたのは、私を迎えてきたキアランと名乗った彼を含めて三人の男性だつた。驚くべきことに、彼らはこれから私の守護役としてずっと神殿に留まるといつ。

『聖女と、彼女を守る三人の騎士』。

どうやら国王陛下は、この国に古来から伝わる聖女伝説を、忠実かつ律儀に再現するおつもりらしい。

「信じられない、本当に信じられない。リュウマチを軽くしただけでなんで聖女？ リュウマチがきっかけで聖女って何それ、ないわよそんなの、どんな人生よ」

枕に顔面を深く埋めたまま、私は愚痴をこぼし続ける。

息苦しくなつてきた頃に、やつとで顔を上げる。そして改めて、自分に与えられた部屋を見渡してみた。

そこは、私が一年間過ごした修道院の宿坊の一室とは、かけ離れた場所だった。

一人で住むには手に余りそうな、食堂並みの広さがある石造りの四角い部屋だ。

天蓋付きのベッドに、私の背の高さほどもある暖炉、高級だと一目で分かる机や椅子に、大きなクローゼットやセンスのいいデザインの鏡が付いたドレッサーなどなど、贅を極めた品々が揃えられている。

そんな中、机の足元に、私がほんの僅かな私物を詰めて持つて来た小さな旅行用トランク 修道院長様に贈つて頂いたものだが、肩身狭そうにちょこんと置いてあって、とてつもない違和感を醸し出していた。

「…………」

私はのろのろと身を起こし、呆然と鏡の前に立つ。
くしゃくしゃで皺だらけな黒い修道服を身に着けた、酷い顔色の自分がじっと見つめ返してくる。

溜息を吐いて、ベールを乱雑に取り、跳ねた銀色の髪を指で梳いた。

それから、まるで糸が切れたマリオネットのようになに椅子に勢いよく身を落とし、両手で顔を覆う。

「落ち着いて、落ち着くのよ、コレット。大丈夫、きっと何とかなる、私が聖女だなんて間違いだったことになつて、すぐに帰れるわ」

自分自身を勇気付けるようと、元気いっぱい、そしてはつきりと声に出して言つ。

何か落ち込みそうなことがあると、いつもひつひつしてきた。そうすると、不思議なことに本当にどうにかなるような気がして前向きた物事を捉えることができるのだった。

けれど。

今回ばかりは、それも上手くいかないようだつた。
それどころか、再びあの緊張の場面が鮮明に蘇る

。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0127z/>

聖女様と呼ばないで（仮）

2011年12月1日22時48分発行